

生涯学習情報誌

Life Learning

1 2019
Jan.
NO.341



生涯学習開発財団

NHKスタジオにて「いだてん」撮影の合間に



▲ 財団事務局長
佐藤梨奈

▲ 大森安仁子役
のシャーロット・ケイト・フォックスさん

▲ 財団理事長
松田妙子

▲ 大森兵蔵役の
竹野内豊さん

あなたは家族に何を繫げますか？

生涯学習開発財団 理事長 松田妙子

ライフラインメンバーズの皆様、あけましておめでとうございます。

毎年私は、皆様への新年のご挨拶で「何か新しいことを始めましょう!!」と言い続けてきました。

もちろん、新しいことへのチャレンジは忘れませんが、今年は、変わらずに続けることの大切さも感じております。と、いいいますのも、新年からNHK大河ドラマ「いだてん」東京オリムピック噺の放送が始まり、そこには私の大叔父・

大叔母である大森兵蔵と安仁子（アニー・シェプリー）が登場しています。ドラマでは脚色されていますが、3月にはドラマ放送後の「いだてん紀行」にて二人の本来の人物像が紹介されるそうです。今年、兵蔵と安仁子が注目されることの喜びとともに、二人の姿を通して、松田家に伝わる文化のよいうなものに思いを馳せております。二人は社会事業家として、日本や社会をもっと良くしたいという強い思いを常に持っていました。その思いは、姪の藤原澄江と、二人が設立した有隣園を手伝う松田竹千代に引き継がれ、澄江と竹千代の娘である私にも引き継がれています。

「いだてん」の舞台でもある、日本が初参加した1912年のストックホルムオリンピック。日本選手団を監督として率いた大森兵蔵は何を後世に残したかったのか。また兵蔵と安仁子を動かした情熱の原点は何だったのか。家族である我々がきつちりと受け止め、家族の文化として子や孫に繫げていくことが大切だと感じています。混沌とした世の中だからこそ、自分の核となる信念や思いが、ますます必要となることでしょう。私自身は松田家に受け継がれてきた「日本や社会をもっと良くしたい」という変わらぬ思いに、情熱を持って取り組み、次の世代にも繫げられるよう行動していきたいと思っています。

何を繫げるかはそれぞれで違いますが、新年を迎え、何を家族に伝えていくべきかを考えてみるのも良いのではと感じております。

鬼の学び

④

正解のない問題に立ち向かう力

作家／出版プロデューサー／劇団主宰

鬼塚忠のアンテナエッセイ

今回は、現在、テレビや雑誌などで注目されているボーク重子さんに、学びや教育についてお話をききました。なぜ彼女が今注目されているかというと、彼女は現在アメリカ人と結婚し、ワシントンDC在住で、娘のボーク・スカイさんが2017年全米最優秀女子高校生に選ばれ、その教育方法が注目されているからです。テレビ出演、講演のお忙しい中おいでいただきました。

鬼塚 まずは、全米最優秀女子高校生を選ぶ大会とは一体どんなものなのでしょうか。

ボーク 娘のスカイが2017年に挑戦した「The Distinguished Young Women of America」(全米最優秀女子高校生)という大会は60年の伝統がある奨学金コンクールで、いわゆるミスコンとは違い、見た目の美しさではなく、知性、才能、リーダーシップなど、その子

の総合力で判断する大会です。アメリカで、高校生に向けた賞の中で最も名誉ある賞で、毎年大きな話題を集めています。過去60年という長い歴史の中でも、私たちの住むワシントンDC地区の代表は過去に数回しか出場歴がなく、さらにアジア系の学生が優勝したのはわずか3回だけ。なので、スカイの優勝は稀有な例として多くの方に注目されました。

鬼塚 話を聞くだけでもすごいですね。では、なぜスカイさんはNo.1に選ばれたのでしょうか。特別な教育方法があったのでしょうか。

ボーク 娘が優勝してから「どんな勉強法を実践していたのでしょうか」という質問を多方面から受けますが、残念ながらこの質問に答えることは難しい。なぜなら、私がやってきたことはそれは全く反対の事だったからです。私は、幼児期から読み書きや計算などの詰め込み教育は一切しませんでした。娘の通っていた初等学校(日本の幼稚園生から小学校3年生までの年齢の子どもたちが通う)では、4、5歳から自分の頭で考え、意見を人前で発表し、問題を解決することを教え込みます。それには、暗記の詰め込み教育はあまり必要ない。だから、小学校に上がる年齢になっても、教科書は使わず、宿題も出ませんでした。全体的にのんびりとした印象で、笑顔の生徒達が目立ちます。それでも、皆全米トップクラスの大学に続々と巣立っていきます。

鬼塚 なるほど。日本も真似したい教育方法ですね。どうしてそんなことが可能なのでしょう。

ボーク それは「全米最優秀女子高生」コンクールでも、全米トップクラスの大学入学試験でも、審査基準として求められているのは、「正解のない問題に、自分らしく立ち向かって解決していく力」だからです。これは従来の「学力」とは違った能力です。

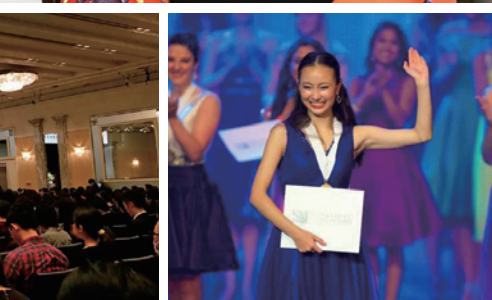
これらを総称して「非認知能力」と呼びます。今アメリカでもっとも重視されている子どもたちの能力は「学力」ではなく、この「非認知能力」です。

私は娘に対して一度も「勉強しなさい」といったことはありませんでしたが、非認知能力を育むことにフォーカスした教育を受けた娘は、自分のやるべきことを理解し、いつも進んで勉強していました。睡眠時間も十分にとり、がり勉とは無縁でしたが、高校4年間の成績もほぼすべてAでした。

さらに娘はバレーにも全力で打ち込んでいました。バレーはもって生まれた身体が評価される厳しい世界なので親としてはさぞ辛いだろうと思う事もありましたが、どんなに高い壁であっても、問題解決のため、自ら考え、解決する強さがさらに磨かれたと思います。そういったことがコンクールでも評価されたはずですよ。

鬼塚 日米に、教育方法の違いはありますか？

ボーク 大きく違いますね。私は福島県出身で、結婚を機にアメリカに移住したんですが、日本の教育を知る私は、当初、アメリカの教育とのギャップに驚きました。日本では学校で勉強。九九を呪文のように唱え覚え。宿題も出ます。先生から「やりなさい」と言われたことをやる。そして「言われたようにやるいい子」です。



● 著者プロフィール

鬼塚忠（おにつか ただし）1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパで金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の版權エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団ももしも主宰でもある。

著書：『風の色』（講談社）2018年映画化。『花戦さ』（角川書店）2017年映画化。日本アカデミー賞優秀作品賞受賞。『Little DJ』（ポプラ社）2007年映画化。『カルテット!』（河出書房新社）2012年映画化。『海峡を渡るバイオリン』（河出書房新社）2004年フジテレビ45周年記念ドラマ化。文化庁芸術祭優秀賞受賞。『恋文讃歌』（河出書房新社）、『僕たちのプレイボール』（幻冬舎）2012年映画化など多数。



● 『世界最高の子育て——「全米最優秀女子高生」を育てた教育法』（ダイヤモンド社）

「学力テスト」ではもう生き残れない。世界でいま最も重視されている、「子どもに必要な5つの資質」を伸ばす方法！



● 『「非認知能力」の育て方：心の強い幸せな子になる0～10歳の家庭教育』（小学館）

「全米最優秀女子高生」を育てた日本人ママの実践的ルール集。2020年教育改革で親に求められる「5つの知識」



● 『世界最強の子育てツール SMARTゴール「全米最優秀女子高生」と母親が実践した目標達成の方法』（祥伝社）

子供の成功は、「親のタイプ」で決まる！「自らやる子」を育てるために、今日から家庭でできることは？



「鬼塚さん、おつかいいただき。1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパで金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の版權エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団ももしも主宰でもある。」

鬼塚さん、おつかいいただき。1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパで金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の版權エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団ももしも主宰でもある。」

鬼塚さん、おつかいいただき。1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパで金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の版權エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団ももしも主宰でもある。」

鬼塚さん、おつかいいただき。1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパで金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の版權エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団ももしも主宰でもある。」



鬼塚さん、おつかいいただき。1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパで金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の版權エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団ももしも主宰でもある。」

鬼塚さん、おつかいいただき。1965年鹿児島市生まれ。鹿児島大学卒業。大学卒業後、2年間かけて、アジア・オセアニア、中近東、アフリカ、ヨーロッパなど世界40か国を放浪。ヨーロッパで金が底をつき、シベリア鉄道で帰国。帰国時、所持金は1万円を切っていた。1997年より2001年6月まで海外書籍の版權エージェント会社「イングリッシュ・エージェンシー」に勤務。映画の原作、ビジネス書、スポーツ関連書籍など年間60点ほどの翻訳書籍を手掛ける。次に海外の作家ではなく、日本人作家のエージェントをしたいと思い、2001年10月にアップルシード・エージェンシーを設立。現在では作家のエージェント会社の経営者であるとともに、作家、脚本家、劇団ももしも主宰でもある。」

祝

2016年7月 早稲田大学博士号(商学)取得

玉置浩伸 さん(取得時50歳)

【論文テーマ】出身企業における破綻等の問題が起業家およびベンチャーのパフォーマンスに与える影響 ― 定性・定量両面からの探索的アプローチ ―
自身のベンチャー経験とノウハウを日本の若者に。そのための博士号

■ベンチャーにおける3者の立場を経験

玉置浩伸さんは、現在家族と共にオーストラリアに住んでいて、日本には仕事をしに半年だけ帰国する。仕事は、九州大学の客員教授としてベンチャー経営の講義を受け持つほか、教員が立ち上げたベンチャー企業の社外取締役として、資金提供者になくなどのフォロワーをしている。常時2、3社から依頼されているそう。来年度からは青森大学、慶應義塾大学でも講義が決まっている。

玉置さんは東京大学卒業後、商社にて、シリコンバレーのベンチャー企業投資や国内でのM&A実務などを経験する。2001年に退社し、『ゴルフダイジェスト・オンライン』を共同で創業。2004年、上場を機に退任し、ベンチャー投資会社を創業。2005年には、米国でキー店のチェーンを創業。投資する側、起業する側を経験し、3本柱のの一つ、若い起業家の育成とアドバイスをする立場も経験したいと思い、大学の教員を目指す。そのために博士号が必要だった。

■リストラや破綻から起業して成功する人たち

博士論文は、起業家がどのように誕生するのか、自らの経験に基づく仮説を学術的に証明するものだった。もう一つ、ベンチャーに関して当時の世の中の言説や、大学、政府の方針が的外れだなど感じていたこともある。

大学は大学発ベンチャーを打ち上げたり、産学連携を模索したりしたが、うまくいった例は多くない。予算圧縮に伴う人員削減など大学側の都合や不純な

動機が見えた。政府は政府で、アメリカで起きたGoogleやFacebookなどに倣って、ベンチャーからイノベーションと言いつつ始めたが、まったく現実をみておらず夢物語でしかなかった。

「実際に日本のベンチャーはどういうところから起こっているのか。実はイノベーションやR&Dのようになかった話ではなく、リストラや企業破綻に遭遇してやむをえず起業するなど、泥臭いところから多くの起業家が出て成功しています。それをこの論文で示したかったのです」

そうした起業の一例をあげると、一時破綻しかけた大京グループからは、多くの起業家が出ている。理由は、ビジネスモデルがシンプルで、資金さえあれば誰でも始められるからだ。ある程度経験を積んだ40〜50代の人が起業して成功を収めている。日本



博士号を取るまでの6年間、家族からは「いい歳をして何やってるの。やめたら」と言われ続けたが。

長期信用銀行の破綻からは、金融的ノウハウを持っている人たちが不動産のリート化やファンド運営などで起業、アセット・マネジャーやリサ・パートナーズなど成功企業も多い。

論文の定性分析の一環で、リストラや破綻経験ありとなしの起業家群に对照インタビューをした。「破綻経験者たちは、そもそも起業するつもりなどありませんでした。イノベーションを起こそうなどとは考えてません。会社を放り出されて、収入がなくなってしまう。それまで会社で培った経験やノウハウを活かして、比較的风险が少ない起業をして成功したんだと話しました」

■もっとガツガツしていい日本の若者たち

日本の論文執筆数、特許出願数など、研究力やイノベーション発信力は諸外国と比べて落ちている。若者たちも、そこそこの幸せで満足なのか、起業して成功するぞとガツガツした学生は少ない。大阪商人の家に育った玉置さんからすると不満だが、それも時代なのかもしれない。

「世界的な起業家の多くが、家族と過ごす時間が少なかったことを後悔するそうです。それだけトップは寝る間も惜しんで働きます。私自身は体力面も含め起業家としては引退ですが、大学の講義を起業家との接点として、元気のある学生が起業したときは、できる限り支援したいと思っています。」

財団の博士号取得支援事業は、財政的支援というだけでなく、大学教員にとって助成を受けたことは一つの業績にもなるので、大変感謝しております」